

本沽間の三十五哩が白河航運の主要部分である。
白河の名は、百から一引いた即ち九十九折の河
流を表したものださうで、河水は黄土のため、コ
ーヒーミルクのやうに黄濁してゐる。
河幅も河口が約三百米、天津附近で二百米に足
りないので、満潮を利用して天津まで潮航し得る
船舶も一千数百噸のものに限られ、それ以上の船
舶は河口の塘沽や、大沽バーに繋留して、北寧線
又は小蒸汽船に依つて天津と連絡するといふ不便
がある。しかも近來、黄土による河底の泥塞が甚
しく、天津港の死活問題として、これが浚渫等が大
いに論議されてゐる。なほ、白河に合流する河北
五大河の中、南運河は、隋の煬帝が建設した白河と
長河と長江とを連絡する大運河であつて、本運河
によれば、天津と山東省の濟南と連絡することも
出来、自然これ等の運河によつて、北支の物資が
天津に集散されることは勿論、北運河によつて天

津、北京、通州間の連絡も自由である。

〔大沽(ター・ク)〕 大沽は白河口の右岸に
ある。前記の塘沽と相

對してゐて、天津より水路で約三七哩、海洋方面
においては芝罘を距ること一九四哩、約一日の航
程である。市街は東沽、西沽の二區に分れてゐる。
人口約七千、大沽港附近の海河に産する魚介は、
天津市民の食糧に上るものが多い。又この地には
清國米穀における數次の對外車變に際して、外人
の心腹を塞からしめたる南北兩砲臺の舊蹟がある
とまれ大沽港は、白河の水運と關連して、北支
那における貨客の吞吐口である。
この地は、八月廿日、わが塘沽守備隊の小部分
に攻撃され、敵は多數の屍體を残して潰走、こゝに
北寧線一帯は我が軍の手に歸したのである。
愈々北支隨一の貿易港天津に入るに先だつて、
この地に於る、敵軍攻撃の顛末を述べて置かう。